
- 新撰組 in 平成 -

-+柚兔+-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

- 新撰組 in 平成 -

【Nコード】

N1753W

【作者名】

* - + 柚兎 + - *

【あらすじ】

私、柊弥和。

私の誕生日の日、彼らが家に居たんだ。
それは私にとって最高のプレゼントで、思い出の一つ。

運命の日

「ん．．．」

初めまして皆さん。私はこの小説の主人公、柊弥和です。ひいらぎみより

只今、ベットの上的なのですが．．．少しおかしい事になっています。いえ、すつごく可笑しい事です．．．何故、私の隣に男の人がいるんでしょうか．．．

昨夜、普通に電気を消して、普通に寝たと思ったのだが．．．まさか．．．不法侵入？

私が黙々と考えていると、不意に男の人のさらさらした髪が揺れ、長い睫毛が上に上がった。

男の人にしては大きく、女の人にしては普通の目が開かれ、その目は私を捕えた。

「．．．君は誰？」

高くも低くもない声が、私の耳に届いた．．．むしろ私が聞きた

い。
「私は柊弥和です．．．貴方は、どうしてここにいますのですか？」
ベットから離れ、私は部屋の中央へと移動した。勿論、服はちゃんと着ている。

男の人は周りをきょろきょろと見渡し、そして私に目を向けた。

「分からない．．．僕はちゃんと部屋で寝ただけど．．．」

そして、男の人はベットから離れた。何故か格好は和服．．．コスプレ？

その人が離れたと同時に、ベットにもう一人居る事に私は気がついた。

ベットで未だ寝ている人に近づくと、黒い髪がもぞもぞと動き、ぴよこり、と布団から顔を出した。

布団の中にいたためか、電気にはまだ慣れず眩しそうにしている。

暫くして目が慣れたのか、その人はベットから離れてもう一人の人に近づいている。

ややこしいから、黒い髪と茶色い髪の人でいいか・・・と二人をボーーーーと見ていた。

「ねえ、此処は何処？」

茶色い髪の人が、首をこてんと傾げて尋ねて来た。

茶色い髪の人がする仕草、一つ一つが愛らしく思えてくるのはどうしてだろうか・・・

「ここは私の部屋です」

もともと私が寝ていたのだから、ここは私の部屋のはずだ。

見慣れた景色、それに友達から貰った特大の人形だつて置いてある。茶色い髪の方は、黒い髪の人と何かを話している。

それにしても・・・あの二人、どうして和服なんだろう・・・それに、なんか髪型が凄い・・・？

暫く二人を見ていると、遠くからどたと走る音が聞こえて来た。私は一人暮らし。だから、私を含めた三人以外にこの家にいる人は居ないはずなのだが・・・

不意に扉が凄い勢いで開き、外からはまたもや知らない人が入ってきた。それも大勢。

「あ、総司、一君、ここにいたんだねっ！」

そう言ったのは他の人と比べて背が低い男の子。ぴよこりぴよこりと上で束ねた髪が揺れている。

とりあえず私は朝食を食べようと部屋をこっそり抜けようとした。

が、それは誰かによつて阻止されてしまった。

「なあなあ、此処って何処なんだ？」

振り向いてみると、なんだか背の高い男の人が興味津々な顔で私を見ている。

「何処って・・・私の部屋ですけど・・・」

この質問をされるのは二回目だけど、何故だか無性に疲れてきてしまった。

もともと一人で居る事が多かった私にとって、いきなり大人数になつてしまったのに疲れを感じたのだろうか？

男の人は私の部屋をくると見渡して、なんだか笑顔でいた。

「てめえは異国人か？」

低い声が近くから聞こえ、私は後ろに振り向いた。

そこにはなんだか怖い顔をした男の人がいた。異国人、というのは・
・・外国人の事だろうか？・・・

「私は日本人ですけど・・・っていうか、貴方達誰ですか？・・・」
この人たちは誰なのか。そして、何故、ここにいいのか。

私はそれを尋ねてみる事にした。そうすれば何か分かるかも知れない。

男の人は、若干驚いた顔で私を睨んでいる。

「俺達をしらねえのか？・・・まあ、いい・・・教えてやろう。」

俺達は

壬生浪士組だ」

正体

「・・・は？」

男の人の口から出た言葉に、思わず変な声を出してしまった。

壬生浪士組、それは新撰組が新撰組になる前の名前だった気がする。否、だった。

社会の担任が自慢げに長々しく話していたものだから、そうだろう。何故、壬生浪士組が此処にいるのか。それは私にとっても彼等にとっても分らない事だろう。

「俺等は屯所で寝ていたはずだが・・・てめえ、何した」

睨まれ、思わずびくりと体が跳ねた。私はその人の顔を見たまま何も言えない。

何をしたって言われても、何もしていないのだから何も言えない。ましてや、こつちが聞きたいくらいなのだから。

男の人と私の目線がずーっとぶつかり合っている。周りの人は、何も言わずにただ周りを見ているだけ。

私は何か良い言い訳がないか、と考えていた。その時、玄関からピンポンと陽気な音が鳴った。

その音で私は男の人から目線を変更でき、ぱたぱたと階段を下りた。玄関を開けた。そこには宅配便の人がいる。・・・そうか、確か送ってくるとか何とか・・・

判子を紙に押し、荷物を受け取って扉を閉めた。少し軽めの荷物なので、あれで間違いないだろう。

男達が溜まる部屋ではなく、私はリビングへと足を進めた。

かちゃり、とリビングの扉を開け、机に荷物を置いて開けようとした。

しかし、錠が自分の部屋にある事に気づき、少し落胆してしまった。渋々立ち上がり、自分の部屋へと行った。階段を一段登る度に溜息をついてしまう。

チラッと部屋の前を見ると、そこには誰もいない。シーンとした廊下があっただけだ。

あれは夢？・・・と思いながら、部屋の扉を開けると・・・居た。彼等は部屋を探索している。

電気を見ながらあーだこーだ。テレビを見ながらあーだこーだ。

はあ、とまた溜息をついて私は部屋の中に入った。そして机の上に置いてあるペン立てに手を伸ばした。

錠を取ると同時に、何故か目の前に刀が来た。みると、そこには先程の怖い男の人が。

「なんですか？・・・私、ちょっと急いでるんですけど」

あれを早く見たい一心で、思わず強気な口調で言ってしまう。

男の人は怖い顔を一層怖くし、刀を鞘に収めた。そして、テレビや電気を指差しながら色々と聞いてくる。

「此れは何だ」

「テレビです」

「何に利用するのだ」

「情報を仕入れたり何かを見たい時に使います」

「利用方法は」

「ここの突き出ている部分を押せば見れます」

「じゃあ此れは何だ」

「電気です」

「何に利用するのだ」

「部屋の中を照らしたりするのに使います」

「利用方法は」

「ここの突き出ている部分を押せば点きます」

同じような質問が幾度と繰り返され、私のイライラは溜まっていく一方。

そして、シャープンを説明し終わると、無限に続くと思われた質問は終わった。

私は爽快に部屋を出て、リビングへと行った。

リビングに着き、小包を鉢で開け、中身を見た。予想通り、届いたのは二通の手紙と新品の携帯。

ぱらり、と手紙を開けると、母親の字であっちの状況がちらちらと並べられていた。

内容を見る限り、元気そうで私はホッとした。そして、もう一通の手紙に目を通す。

こっちは父親からで、雑でも綺麗でもない字で私への愛が書かれていた。

そして、最後に誕生日おめでとう、と綺麗な字で書かれていた。それは母親も同じだった。

そう、今日で私は16歳になった。新品の携帯は誕生日プレゼントだ。

手に取ってみると、凄く軽かった。中を開ければ、そこには大好きな猫の画像が表示されていた。

まだ何もされていない携帯。私は今の携帯を取り出し、登録されているアドレスや画像などを移して新品の携帯を弄っていた。

「なんだそりゃあ・・・」

不意に頭上から声が聞こえた。上を見ると、背が高い男の人がまたもや興味津々の顔で携帯を見ている。

私は弄るのをやめ、棚からもう何年も使っていない子供用の携帯、所謂キッズ携帯をその人に渡した。

その人は目を輝かせ、何やら色々としている。私はくすりと笑ってその人を撮った。

パシャリ、という音と光に驚いたのか、その人は持っていた携帯を床に落としてしまった。

勿論、使っていないので別に壊れてもいいのだが、その人はあわあわと携帯を拾って傷が付いていないかを念入りに確認していた。

私がついている携帯の画面に映った自分を見て、その人は凄く感心していた。

「小さい俺が・・・なあなあ、どうやってするんだ？」

キッズ携帯を持ちながら、その人は私を見て来た。私はまったくすと笑って、撮影モードを教えた。

その人は真剣に聞いて、そして聞き終えたと思ったたらキッズ携帯を持ってリビングを出て行った。

その後、上から何やら悲鳴と怒声が聞こえたのは気のせいと言う事にしておきたい。

「・・・これが携帯と言うものか」

怖い顔の人は、携帯を警戒しながらまじまじと見ている。周りにいる人も同じような事をしている。

背の高い人は、自慢げに撮影モードを説明しながら試しに、と優しいような顔をしている人を撮った。

いきなり撮られて驚いたのか、優しいような顔をしている人は後ろに転げた。

怖い顔の人は呆れた顔で額を押さえている。黒髪の人は無表情。それ以外の人は笑っている。

私はかちかちと両親にメールを打った。そして、送信する。その時、ピロリンと送信完了の可愛い音が鳴った。

それと同時に、皆が一斉に此方を向いた。背の高い人に至っては、また目を輝かせている。

「・・・てめえ、何をしゃがった」

ぎろりと怖い顔の人に睨まれ、思わず目を逸らしてしまう。が、逸らした先にいたのが背の高い人。

「なあなあ、何やったんだ？」

どっちもどっち。私は諦めて溜息をつく、部屋を出た。そしてリビングへと足を進める。

リビングにつくと、さっきまで使っていた前の携帯を手に取り、部屋へと戻った。

そして、メールモードを起動させ、前の携帯にメールを送った。そ

の時、また音が鳴る。

「先程鳴ったのはこの音で、私はメールを送っただけです」

そう言っただけだと携帯を閉じた。そして服のポケットに入れた。

その時、メールだよ、というまたもや可愛い音・・・否、声が聞こえた。

すると、背の高い人は誰よりも早く私の前に来て、また質問責めに私はあった。

一通り説明し、私はポケットから携帯を出さずに現在此処にいる人の人数を数えた。

8人。私は何度も確認し、部屋を出た。そして台所へと行く。

世話

こぼこぼとお茶を淹れる音だけが聞こえる。

流石に8人分となると、急須では足りないため、私はポットで湯を沸かした。

冷たいお茶でもよかったのだが、生憎、私にはそんな気遣い心など無い。

だが、流石に熱々では困るだろうと思い、二、三個氷をいれてコップをお盆に乗せた。

お茶が零れぬよう、慎重に階段を上る。最後まで何事もなく、上れた事にホッとした。

そして扉を開けるという最大の試練が私にのしかかった。しかし、私はその時の為の秘策を用意していた。

それは、一度お盆を床に置き、扉を開けてからまた持って部屋に入るというもの。・・・まあ、秘策というほどでもないが・・・

扉に手をかけ、一気に開けた。と、同時に誰かが廊下に倒れ込もうとしている。

見ると、それは優しいそうな人・・・どうやら扉に背を預けていたようだ。

私は足でその人を受け止めた。少し失礼だが、咄嗟の判断なので仕方がない。

そしてその人を部屋の中に戻すと、お盆を持って部屋の中に入った。机の上にお盆を置くと、開けっぱなしの扉を閉めて机にお茶を置いた。

置く度にからん、と氷が揺れる音がし、溶けかけているところを見れば、丁度いい温度だろう。

「おお、すまんねえ・・・」

優しいそうな人はそう言って、ははっと笑った。私はいえいえ、と言って少し控えめに笑った。

むわり、と蒸し暑い空気が私を撫でた。夕方なので涼しい方とは言え、窓や扉を完全に締め切っているのて涼しいとは言えない。

私はテレビの上に置いてあるリモコンを取って、クーラーを起動させた。

ぴぴっという音と共に、クーラーは動き始め、心地よい風が部屋の中を駆け巡った。

「お茶って言うと、甘味が欲しくなりますね・・・すみません、甘味、ありませんか？」

そう茶色い髪の人に言われ、私は何か甘いものは無かったか、と少し考えた。

「総司、この方に迷惑だろう。甘味は少し控えなさい」

優しいような人に言われ、茶色い髪の方は少しむっとした様子で「はい」と答えた。

別に私としては迷惑なんかではないし、むしろ固くされた方が私も固くなってしまうので、これくらいがちょうどいい。

そして、ぽん、っと手を叩いて、私は部屋を出た。今日だけで部屋を何度出たことやら・・・

台所に行き、冷蔵庫を開けて中を覗いた。中には、チョコとお饅頭、それにアイスもあった。

どれが茶色い髪の人の好みか分からない私は、とりあえず全て持っていく事に決めた。

どうせ、あの人以外にもあげるのだから、一つじゃなくてもいいかと私は思い、お菓子が沢山入っているお菓子ボックスを持って部屋へと戻った。

「っと・・・どれでも好きな食べちゃって下さい」

どんっと机に置いたお菓子ボックスを見て、茶色い髪の方は少し首を傾げている。

そして、お菓子ボックスからチョコを取り出して、私を見てきた。

「これは何ですか？」

そう言われ、思わず知らないのか？と言いつうになつたが、止めた。知らないのは当たり前だ。なんせ、幕末にはチョコ以外にも現代のお菓子が無い。あるのは和菓子類だけだろう。

「それはチョコレートと言つて、甘いお菓子です。貴方達の時代には無いお菓子で、お口に合うかどうかは分かりませんが・・・」
そう言つと、茶色い髪の人には銀紙を少し苦労しながら剥ぎ、チョコを割り、その一欠片を口に含んだ。

途端に茶色い髪の人顔はパアッと明るくなり、チョコを物凄い勢いで食べ始めた。

どうやらお気に召したようで、私はホッとした。早くもチョコを食べ終えた茶色い髪の方は、次のお菓子に手を伸ばしている。

掴んだのはクッキー。それもチョコレート味。偶然なんだろうけど、私は少し笑ってしまった。

他の人も食べているが、どうやら甘いものが好きなのは茶色い髪の人だけらしい。

私の好みはチョコやミルクなどの種類で、抹茶や小豆などはあまり好きではない。

だが、和菓子が多い世界なので、そういう系なら受け入れるのではないかと私は思い、また部屋を出た。

台所に行き、冷凍庫を開けた。そこには、抹茶やら小豆やらのアイスが沢山入っている。

中には珈琲味も入っており、これは気にいられるかどうか定かであつた。

とりあえず、何種類かを選んで持つていき、他の人達に渡した。ちなみに茶色い髪の方は、お菓子ボックスに満タンだったお菓子達を、半分ほどに減らしていた。

抹茶や小豆を食べた人たちは、これなら食べられる。とアイスを嬉しそうに頬張つていた。

ただし、黒い髪の方は無表情。それに、何故か黒装束の人でも無表情で食べていた。

珈琲味は、全員が気に入ったようで、もうないのか、と催促されて
しまうほどだった。

話し合い

「どうすれば屯所に戻れるだろうか・・・」

優しそうな人は腕を組んで、険しい顔でうーんと唸っている。

他の人達も、何やら考え事をしたり、と人其々。ひとそれぞれ

今の議題は、どうすれば屯所（この人たちにとっては家らしい）に帰れるか。

新撰組の人達は勿論、私さえもその方法を知らないので、いきなり難題に直面してしまった。

家に帰れないのはさぞ嫌だろう・・・と私は思い、自分から話し合いに参加したいと頼んだ。

せめて、この人たちが元の時代に帰れるまで居座れる場所があると良いのだが・・・と私は考えた。

そこでひらめいた。そうだ、この人たちが居座れる場所があればいいだけの話だ。

私は優しそうな人に近づき、そっと耳打ちした。

「なっ・・・それは・・・」

優しそうな人は、驚いた声を出した。その声で、一斉に視線が優しそうな人に集まった。

「でも、野宿よりはましじゃないですか?・・・」

首をかしげて言うと、優しそうな人は「しかし・・・」と顔をしかめ顰めている。

「近藤さん、どうしたんですか?」

茶色い髪の人が優しそうな人に近づき、私と同じように首を傾げて聞いていた。

優しそうな人は顔を顰めたまま、言っのを躊躇っている。

「貴方達が元の時代に帰れるまで、私の家にいればどうですか?と言ったんです」

にこりと微笑んで言うと、次は視線が私に集められた。

そう、私が提案したのは、元の時代に帰れるまで家に居ればいいという事。

なんせ、私は今一人暮らしの様な状態だ。誰も居ないのは寂しいし、何よりもこの人たちの事が心配だった。

「近藤さん、それでいいんじゃないか？」

怖い顔の人がそう言う。だけど、優しい顔の人は承諾しようとしている。

「まあ、別に私の家じゃなくても頑張ればマンションの一部屋くらいは借りれますけどね・・・貴方達が捕まるのは、私にとっても貴方達にとっても嫌な事ですし、ね」

私が言えば、皆、は？と言う顔をしている。・・・あれ、何か変な事言ったっけ？

「捕まるのですか？・・・何故？」

茶色い髪の人がそう私に問う。それで私の疑問は解決した。

そうだ、この人たちの居た時代には銃刀法違反と言うものが無い。・・・それに、この人たちが捕まえる立場だったから、捕まると思いませんだろう・・・。

「今の日本には、銃刀法違反と言う法律がありましてね・・・刀や銃などは持つていてはいけませんよ。万が一、法律に背いた場合は捕まります。死にはしませんが・・・まあ、嫌な所には入れられません」

「嫌な所とは？」

「刑務所と言って、捕まった人が入れられる場所です。最低限、ご飯や睡眠、入浴は与えられますが、男色（＊）の方が居たりきつい業務をやらされたり・・・まあ、疲れますよ。色々と」

男色、という言葉に私を抜いた全員の血の気がサーッと引いていったのが分かった。

それはあの黒髪の人と黒装束の人でも、だ。

それほど男色と言うものは恐ろしいものかと、私は少し身震いした。・・・ああ、自分は女で良かった・・・

「こ、近藤さん・・・それは流石に・・・」

「あ、ああ・・・柊さん、と言ったかね」

焦る怖い顔の人と優しいそうな人。そして、自分の名前を呼ばれて私は反応した。

「弥和でいいです。・・・承諾していただけますか？」

「ああ・・・すまないが、戻れるまでお世話になるよ」

そう言われ、私は笑顔で頷いた。心は嬉しい気持ちでいっぱいだ。

話し合い（後書き）

男色・同性愛の方。この場合、男の人が男の人を好む、ということ。

自己紹介

新撰組の方々が此処に住む事になってから、色々和未来と過去の事を話し合った。

過去では、どうやら芹沢暗殺の前日だったらしく、心のどこかで何故かホツとしてしまった。

未来の事では、道具の説明をした。

そしてその後の流れで、自己紹介をする事になった。

まずはじめに、優しいような人が立ち上がり、全員の視線がその人に集まった。

「私は壬生浪士組局長、近藤勇だ。なんだか色々分らないが、此れから宜しく頼む」

はははと笑うその姿に、私も思わずくすりと笑ってしまった。この人は父親ポジションだな、と思いながら。

近藤さんの次は、怖い顔の人だった。立ち上がらずに、壬生浪士組副長土方歳三。とだけ言つてそっぽを向いた。・・・なんだか絡みづらい人だなあ・・・

土方さんの次は、茶色い髪の人。

「私は壬生浪士組一番隊隊長、沖田総司です。宜しくお願いしますね」

にこりと笑ったその顔に、何故か寒気がしたのは気のせいだろうか？・・・人懐っこそう。

沖田さんの次は、黒い髪の人。この人も立ち上がらず、真っ直ぐと私を見たまま、壬生浪士組三番隊隊長斎藤一。と言っただけだった。目をそらさずにいてくれるのは有りがたいけど・・・なんだか、土方さんとは違う意味で絡みづらそうな人だと思ってしまう。

斎藤さんの次は、背の高い人。思いつきり立ち上がって、にひっと笑っている。

「俺は壬生浪士組十番隊隊長の原田左之助っ！宜しくなっ！」

この人は何だか淒くいい人そう・・・っていうか、淒い大人の色気が出てるなあ・・・と好奇の目で見ていた。

すると、原田さんの後ろに原田さんより一回り小さい男の人が乗っかる。そして、けらけらと笑う。

「壬生浪士組二番隊隊長の永倉新八。左之に近づくと妊娠しちまうぜー」

けらけらと笑っているが、内容が内容なだけに私は苦笑いしか出来なかった。

すると、背の小さい男の子が永倉さんの頭を豪快に叩いた。べしつと良い音が鳴ったと思えば、永倉さんは頭を押さえて悶絶している。・・・そんなに痛かったの？

すると男の子は満足げにニツと笑って、私の方を向いた。

「俺は藤堂平助。壬生浪士組八番隊隊長でこれでもちゃんとした大人だから！」

大人と言う言葉に、思わず驚いてしまった。それに気づいたのか、藤堂さんは不満げな顔になった。

「あ、す、すいません・・・」

慌てて頭を下げると、藤堂さんも慌てていいいいよ、と言ってくれた。

永倉さんがこいつは慣れてるから謝らなくてもいいんだよ、と言っていたが、慣れているなら尚更だ。

藤堂さんは永倉さんをまたもや思いつきり叩いた。が、永倉さんは避けてその手は原田さんへと当たった。

当たった原田さんは藤堂さんをぎろりと睨んで、追いかけてまわしている。

永倉さんはそんな2人を見て、けらけらと楽しそうに笑っていた。

「壬生浪士組監察、山崎丞です。宜しく願います」

淡々と言う黒装束の方に私は何故だが興味が沸いてしまった。

そして、私は立ち上がってにこりと微笑んだ。

「柊弥和、16歳。これから宜しく願います」

ぺこりとお辞儀し、時計をちらりと見た。長い針は7を指し、短い針は12を指していた。

そろそろご飯時だなあ・・・と思い、私は部屋から出た。そして、台所へと向かった。

夕ご飯

今日の夜ごはんは、予定では簡単に済ませるつもりだった。

だが、思いもよらぬ出来事が起きたので、そうもいなくなる。

私は冷蔵庫を開けて、中の使えそうな食材達を机の上に出した。

私をいれて9人もいる。ので、必然的に多く作らなければいけない。

調味料入れを見ると、カレーのルーがあつた。しかし、食材の数が足りない。

私は顎に手をやり、少し考えた。けど、目の前に置かれている食材ではどう考えても足りないの、結局買いに行く事になった。

「すいません、少し外へ出てきます。ので、晩ご飯は遅くなってしましますが・・・」

新撰組の人達は、別にそれでもいい、と快く承知してくれた。

私は寝巻きとなっている服から、ラフな格好に変える為クローゼットを開けた。

そして、白に銀で字が書かれたTシャツと太股が隠れるくらいの短パンを出してお風呂場で着替えた。

そして財布を取りに部屋へ戻った私を見て、斎藤さんと山崎さんを除いた人たちは驚いた顔をしていた。藤堂さんに至っては、ぷいっと顔を逸らされるほど。

私は長つたらしい髪をゴムで適当に括り、財布を取って部屋を出ようとした。

その時、近藤さんに呼び止められた。振り返ると、近藤さんが心配そうな顔をしている。

「こんな夜にそんな格好の女子が一人で出歩くのは非常に危ない。

だから、誰かと一緒に行きなさい」

そう言われ、私は一度頷いた。・・・別に、襲われたりはしないし・・・何だろう。心配性なのかな？

「誰か一緒に行ってくれるかね」

近藤さんはそう言っただけで、永倉さんと原田さんが真つ先に手をあげた。そして、それにつられて藤堂さんと沖田さん、それに斎藤さんが意外にもあげていた。まあ、流れからして渋々だろうがね・・・

「弥和さん、誰がいいかな？」

私は別に誰でも良い、と言うと、近藤さんがじゃあ・・・と言って沖田さんを選んだ。

沖田さんは近藤さんに任命されたのが嬉しいのか、嬉しそうな顔ではあいた言っただけで私に近づいてきた。

「じゃあ、行きましようか」

そう言われ、私は頷いた。と同時に、あ、と声を出した。

不思議そうに振り向く沖田さん。私はとある一部屋に行き、洋服を引っ張りだした。

それは父親の洋服で、少し沖田さんには大きいかな？と思いつつも着替えるよう沖田さんに言った。

和服で歩かれると、それこそ逆に目立ってしまったて怪しまれる・・・かもしれない。

父親の洋服を着た沖田さんは、これが異国の服かーと感心していた。そして、私と沖田さんは行ってきます、と言って扉を開け、外に出た。

涼しい風が私と沖田さんの髪を撫で、月夜が私達を照らしていた。暫く沖田さんと雑談しながら、スーパーへと足を進めた。

スーパーに付き、私は沖田さんに外で待つといってもらうように言った。

沖田さんはそれを承諾してくれ、私は微笑んでスーパーの中へと入った。

今日のご飯は唐揚げにしようと思い、私は肉のコーナーへと足を進めた。

肉を7パックくらい買い、ついでにお米も買ったため、私の財布は軽くなってしまった。

まあ、それでもいいか・・・と思い、米が入った袋を片手に持った瞬間、ずしりと手が重くなった。

米が入っているのだから当たり前か、と苦笑しながら外に出ると、沖田さんが笑顔で待ってくれていた。

そして、重そうに持っている米を見て、持っているとわれたので、私はその言葉に甘えた。

軽々と米を持つ沖田さんを見て、中性的な顔でもやっぱり男なんだなあ・・・と感じた。

そして家に帰るまでの間、他愛もない会話で私達はずっと笑っていた。

かちやり、と玄関の扉を開け、台所へと私達は行った。

そして、沖田さんに礼を言うと言った沖田さんはいえいえと笑って次は手伝うと言ってくれた。

だけど、唐揚げと言うと、沖田さんは困ったように眉を下げて笑った。

そしてごめんね、と謝られてしまったので次は私がいえいえと言う番になった。

沖田さんに部屋で待ってもらおうと言い、私は唐揚げ作りに取りかかった。

ご飯を炊き、7パック全ての肉を使い、晩ご飯は完成した。

何処で食べるか迷ったが、やはりご飯はリビングで食べるのがいいだろうと私は思い、散らばった私物を隅に寄せてリビングに皆を集めた。

お茶碗は来客用も合わせてぴったりの9個あり、唐揚げは大きな皿に乗せて机の中央に置いた。

そして全員で頂きますと言った後、恐る恐る原田さんが唐揚げを毒味と言う名で一口食べた。

不味かつたらどうしよう、と不安があつたが、原田さんは笑顔で美味いっ！と言ってくれて、私の不安は消え去った。

他の皆も美味しいと言ってくれ、私は嬉しい気持ちでいっぱいだった。

沢山あつたはずの唐揚げは既に無くなり、半分以下になつた頃には取り合いが始まるくらいだった。

勿論、取り合っているのは原田さんと永倉さんと藤堂さんの三人。仲がいいなあ、と白米を食べながら思っていた。

皆が食べ終わり、私は後片付けをするために食器をお盆に乗せて台所へと行った。

お茶碗タワーを崩すことなく運べたので、ホッとした。そして、皆を連れて家を案内した。

「ここは寝室です。私は自分の部屋で寝ますので、どうぞご自由にお使い下さい」

「ここはトイレ・・・厠です。ここで用を足して、これを上にあげると流れますので・・・流さないとかは無いですからね」

「ここは浴場。勿論、何人でも入ってもかまいませんが、狭いのでぎゅうぎゅう詰めになると思います」

「最後に、ここは父と母の部屋です・・・が、入らないでください。入ったら怒りますから・・・以上となりますが、何かご質問は？」
そう言つて見ると、手は上がつておらず、私はにこりと微笑んだ。

「和服は家の中だけにしてください。外へ行く時は、必ず私に言う事。刀を振りまわすのは家の中だけ。人を殺すのは勿論禁止・・・殺したら捕まりますから」

そう言つて、私達は部屋に戻った。重たい雰囲気が私達の中で流れている。

「そうだ・・・テレビ見ますか？・・・この時間だし、何かしてるかも」

そう言つて、私はテレビをつけた。パツと画面に人が映り、重たい

空気は一変して軽くなった。

それは、皆がテレビに釘付けになっているからで、私はリモコンでチャンネルを変えて行った。

【美世、お母さんは必ず貴方を迎えに来るから・・・いい子で待ってね】

【うんっ！待ってるから、絶対に戻ってきてねっ！】

【邪魔だあっ！どけええええっ！】

【・・・うっ・・・】

【お母さんっ！いやあああああっ！おかあさあああんっ！】

母親と思われる人が子供に笑顔で言い聞かせている途中、包丁を持った男の人が入ってきて、女の人を撃った。

女の人は呻き声をあげ、ぱたりと倒れた。それを見た子供が泣きながら叫んでいる。

・・・なんかすごいなあ、と思いながら、チャンネルを変えた。

【次のニュースです】

【私達の力、受けてみなさいっ！レインボースクリューっ！】

【腰を軽く下げ、手を上にあげます】

【この財布、いい感じでしょう？】

【なんでやねんっ！】

色々な番組がある、が、私は決めれないなあ、と近くに居た近藤さんにリモコンを渡した。

リモコンの操作方法を教えて、私はベットに寝転んだ。そして、携帯を弄る。

幸い、今は夏休みの初めなので、私は家に居れる。・・・まあ、見張る必要もないと思うけど・・・

ふとある事を思いだし、私は部屋を出た。皆はテレビに没頭していて、気付かない。

リビングに行き、ごそごそと棚を漁った。そして、お目当ての物が見つかった。

救急箱を持ち、私はリビングのソファーに腰掛けた。そして、救急

箱を開ける。

「ごそごそと漁り、消毒液と絆創膏を取りだした。先程ご飯を作っていた時に、少し包丁で切ってしまっていたのだ。

消毒液を傷口に垂らし、痛みを耐えながら絆創膏を巻いた。

「何をしているんですか」

いきなり後ろから話しかけられ、思わずびくりと体が跳ねてしまう。後ろを向くと、そこには山崎さんが居た。相変わらずの無表情。

「えーっと・・・傷の手当てっていうか・・・そんな感じです」

曖昧な答えを返し、私は絆創膏を見せた。ついでに消毒液も。

山崎さんは二つを交互に見て、何かを考えていた。

その時気が付いたのは、山崎さんの手に傷が幾つもある事。どれも刀傷。

来る前に斬られたのか、血が固まっている傷もあったので、私は山崎さんをソファーに座らせて傷の手当てをした。

沢山あった刀傷の一つ一つに絆創膏を貼ったので、山崎さんの手は絆創膏だらけとなった。

「ありがとうございます」

それでも山崎さんは、フツと口角を微かに上げ、笑った。無表情しか見たこのない私は嬉しくなった。

これで、一つ彼の違う面を見れた。それだけで心がうきうきした。・

・・・恋愛感情じゃないよ？・・・

そして、二人で部屋に戻った。・・・部屋の中は、凄い光景になっていた。

近藤さんは涙を流し、土方さんは薄らと涙目に。沖田さんは面白くなさそうに欠伸をしていて、原田さんと永倉さんと藤堂さんは何故かベットのの上に寝転がって雑談をしている。斎藤さんは私の本を読んで、若干笑みを浮かべている。

私達が帰って来たのに気付いたのは、沖田さんただ一人のみ。・・・なんか凄く不満そうな顔してますけどね・・・

就寝

「す、すまない・・・ズピ」

近藤さんにティッシュを渡すと、近藤さんは違う方向を向いて豪快に鼻をかんだ。

気遣ってくれるのは嬉しいんだけど、なんだか少し胸が痛んだ・・・なんでだろう。

「ねー、あの甘味食べたいんだけど・・・ない？」

そう言つて沖田さんは立っている私に対して若干上目で聞いてきた。どうしても可愛いと思えてしまう私は、少し顔が赤くなるのを感じた。

お菓子ボックスを持って来ると、沖田さんの顔が嬉しそうな顔になり、私はくすりと笑った。

そして斎藤さんに目をやると、斎藤さんは未だ薄らと笑みを浮かべている。

手に持っているのは、私の本で一番気にいっている探偵ものの小説。意外と気が合うのかな？とか期待してみたりした。

次にベットの上にいる三人に目をやると、いつの間にか三人とも寝ている。

近づいて寝顔を見ていると、なんとも癒された。ほんわかした気持ちでいると、不意に後ろから視線を感じた。

振り向くと、後ろに立っていたのは山崎さん。なんだか凄い殺意っていうか・・・敵意のある目で見られている。

私が邪魔なのか、と思ってベットの近くから退いた。が、山崎さんは変わらずベットを見ている。

そこで気付いた。どうやら、山崎さんが見ているのは寝ている三人らしい・・・。

なんでかなあ？とか思ってみたりしたけれど、答えは出なかった。

「んー・・・もうこんな時間ですね・・・そろそろ寝ないと」

時計を見ると、いつの間にかもう12時前だ。そろそろ寝ないと・
・と思ったが、誰も寝るような気配はない。

「今は何時なんだ？」

土方さんに言われ、私は夜の12時です。と答えた。だが、土方さんは分からない、という顔をしている。

「えーっと・・・なんて言えばいいんだろう・・・子の刻ねこく(*)？・
・・」

そう言うと、土方さんはああ、と納得してくれた。まさか、社会の担任の無駄な知識が此处で役立つとは思わなかった。

私は軽く図形で時間を説明した。簡単な説明だが、皆は分かってくれたようでホッとした。

そのついでに現代の字も教え、平仮名なら読めるくらいになった。それを皆が理解する時の時間は、既に2時。どんだけ時間かけたんだろう・・・

「さてと・・・そろそろ寝ましょうか。・・・三人はあそこで寝ていてもらいましょうか」

私はそう言って、立ち上がり、三人に布団をかけた。丁度川の字で寝ている三人を見て、くすりと笑った。

「では、弥和さんは何処で寝るんだい？」

近藤さんの問いかけに、私は父親と母親の部屋で寝る。と笑顔で答えた。

そう言うと、なんだかホッとしたような複雑なような顔をした沖田さんが近藤さんと土方さんを引つ張って部屋を出た。

私はまだ睨んでいる山崎さんの手を取って、山崎さんを引きずるような形で部屋を出た。

そして、廊下を歩いている時に不意に視線を感じてしまった。山崎さんを見ると、なんだか少し照れているような気がする・・・？ちなみに、山崎さんはもう起き上がって隣を歩いている。

「どうしました？」

「あ、いえ・・・手が気になりました」

そう言われ、私は手を見た。そして気づいた。・・・手を繋ぎっぱなしだった。

「ご、ごめんなさいっ！・・・無意識とは言え、繋いじったりして・・・」

パツと即座に手を離れた。

いえいえ、とほんの少しだけ口角をあげて言われ、私は本当に申し訳ない気持ちになった。

山崎さん、私と手を繋ぐの嫌だったよね・・・ほんとに申し訳ない・・・

特に会話もないまま、私達は部屋の前で別れた。なんだかやっぱり申し訳ないや・・・

父親と母親の部屋に入り、私は豆電球にしてベットにダイブした。そうして、目を閉じると私の意識は深い闇へと包まれていった。

就寝（後書き）

子の刻 - 昔の時間の呼び方。

起床

「・・・」

薄らと目を開け、私は周囲を確認した。

薄暗い部屋の中は誰も居らず、カーテンから薄く光が漏れている。重たい体を起こし、カーテンの近くまで行くとカーテンを開けた。朝日が降り注ぎ、眩しくなって少し目を細めた。が、直ぐに慣れ、目を擦りながら部屋を出た。

シーンとしている廊下を見ると、昨日の事は夢かと思った。

夢なら、ずっと覚めないでいてほしかったが・・・やはりどうも残念だ。と一人とぼとぼと廊下を歩いた。

朝の廊下は冷たく、足の裏から徐々にひんやりと体が冷えて来た。階段を上り、かちやりと部屋を開けた。眠たい目を擦りながら部屋に入ると、ガタガタつという音が隅から聞こえた。

視線をそっちに移すと、赤い顔をした・・・藤堂さんが口をぱくぱくして私を見ている。

・・・ああ、夢じゃないんだ。途端に私は嬉しくなり、微笑んだ。

「おはようございます、藤堂さん」

挨拶をすると、藤堂さんはそっぽを向いておはよう、とだけ返してくれた。

何故、慌てているのか・・・私は頭の上にハテナマークを浮かべながら、藤堂さんに近づいた。

私が一歩近づく度に、藤堂さんの顔は赤くなっていく。

ついに一歩手前あたりまでに行き、私はその場に屈んで藤堂さんを見た。

「・・・藤堂さん、私を見て下さい」

そう言っても、藤堂さんは私を見てくれない。なんか無性にイラついてしまう。

「何で見てくれないんですか？・・・私の事、嫌いなんですか？」

その言葉に、藤堂さんはバツとこっちを向いて違うつ！と叫んできた。

叫ばれた事に若干驚いたものの、私は微笑んで藤堂さんの両頬を両手で挟んだ。そして、もう顔を逸らさないように、と固定した。

「やつと見てくれましたね・・・おはようございます、藤堂さん」

「お、お・・・おはよう・・・」

藤堂さんの顔は茹でダコのように赤い。その顔をみて、私はくすりと笑った。

そして手を頬から離し、藤堂さんから離れた。その時、二つの視線に気がついた。

「おーおー、若いねえ」

「平助やるな・・・もう落としちまったのか」

けらけらと笑いながら、藤堂さんをからかっている原田さんと永倉さん。

「原田さん、永倉さん、おはようございます」

そう言っただけはぺこりとお辞儀した。二人はこっちを向いて、挨拶しようとしてくれたんだらうけど・・・なんか固まっている。

「大丈夫ですか？お二人方」

私が言うと、二人はくくつと顔を見合わせて笑ったあと、ベッドから降りて私に近づいてきた。

「なあ、弥和はいつの間にそんな大胆になったんだ？」

「そうそう・・・なんだあ？俺等に気があるのかあ？」

「？」

言っている意味が分からないので、私は首をこてんと傾げた。

二人は私を指差した。指を差された方向を見た私は、目を見開いた。私が来ているのはボタン状のパジャマ。下着の上に直接着用するタイプだ。

そのパジャマのボタンが、二、三個ほど外れている。それも、上から順に、だ。

勿論、下着は見えているわけで・・・私は恥ずかしくなった。

藤堂さんが目を逸らすのも当たり前で・・・それなのに、私は・・・何て事を・・・

「あう・・・藤堂さん、すいませんでした」

頭を下げると、藤堂さんは慌てながら許してくれた。・・・私は失礼な事を二度も・・・申し訳ない・・・

私はパジャマのボタンをつけ、クローゼットから服を出そうとした。その時、原田さんが後ろからにゅっと手を出してきて、ある服を出した。

そして、その服をまじまじと見て、永倉さんと藤堂さんと何かを相談している。

それから私にその服を渡してきて、着るように頼まれてしまった。・・・これを？

今、私が着るように頼まれている服は、肩が見え胸元から太股辺りまでの長さのワンピース。リボンが腰辺りについていて、なんとも女の子らしい服だった。

私には似合わないとは断定し、クローゼットで眠っていた服を着るように言われ断ろうとした。が、私がしてしまった失礼な事を思い出して、渋々頷いた。

原田さん達を部屋の外に出し、その服を着て私は原田さん達の前に出た。

勿論、ワンピースの下にはスパッツを履いている。ちなみにブラは、紐がないやつにした。

「うう・・・やっぱり恥ずかしいですよ」

顔が熱くなっているのを感じながら、三人の目線に耐えていた。

三人はくくつと笑って、私の手を引いた。そして、そのまま下に行く。

どうやら今日はこの服で過ごさなければいけないらしい・・・これじゃ償いにもならないよ・・・

台所の前で別れ、私は朝ご飯を作ろうと考えた。

昨日の夜、朝用にご飯を炊いていたのでご飯はある。調味料入れを見ると、お茶漬けが目に入った。

・・・朝にこつてりしてるのを食べるのは嫌だよね・・・よし、お茶漬けにしよう。

調味料入れの奥にあるお茶漬けの素に手を伸ばした。が、どう考えても届かない。

仕方なく椅子を持ってきて、私はその椅子に上ってお茶漬けの素を手を取った。

その時、ぐらりと体のバランスが崩れ、私は体は横に傾いた。ゴンっという音と共に、ジンジンと頭に痛みが走る。・・・ああ、痛い。

あまりの痛さに悶絶していると、不意に頭上に気配を感じた。顔をあげると、そこに居たのは斎藤さん。なんだか不思議そうな目で私を見ている。

涙目になっているが、そこにあえて触れないでくれるのは斎藤さんの優しさ？・・・いや、誰も触れないか。

私は斎藤さんに支えられて起き上がった。礼を言うと、斎藤さんはふいつとそっぽを向いて何処かへ行ってしまった。

「・・・私って嫌われてんのかなあ・・・」

ぼそりと呟き、私は溜息をついてご飯をお茶碗に入れた。

その上からお茶漬けの素をかけ、お湯を入れて朝ご飯は完成した。皆を呼ぶため、私は土方さん達が寝ている部屋へと向かった。

部屋の外では、斎藤さんが溜息をつきながら天井を眺めていた。・・・

・考え事、かな？

話しかけるのはよくないだろう、と思い、私は斎藤さんの前を通って部屋へと入った。

部屋の中では、原田さん達が土方さん達を起こしていた。が、一向に起きる気配はない。

私はとりあえず近くで寝ていた山崎さんを起こす事にした。そそくさと山崎さんに近づく。

肩に触れ、ゆつくりと揺すってみた。が、目は開かない。

「山崎さん、朝ですよ。起きて下さい」

揺すりながらそう言っていると、山崎さんの目がゆつくりと開かれた。が、その目は明らかに殺意を含んでいる目。

「やかましー奴やなあ。わいは今寝とるんや。そんなに殺されたいんか？」

いつもの山崎さんとは違う喋り方。それに気付くと同時に、クナイが首にあてられた。

初めてみる本物に、恐怖心が出て来た。・・・起こしただけでご愁傷様だなんてイヤすぎる・・・

「や、山崎さん・・・あ、朝ですけど・・・も、もう少し・・・寝ますか？」

なんだか凄く変な喋り方になったのは気にしたい・・・

山崎さんは今の状況が少しだけ把握できたのか、首からクナイを退かしてくれた。

これで、とりあえず命の危機は逃れた、と私はホッとした。

「・・・すいません。朝は滅法弱いもので・・・」

申し訳なさそうな声が聞こえた。どうやら、状況が呑み込めたようだ。

私はいえいえ、と笑顔で言っ、朝ご飯出来てますよ、と言った。

そして立ち上がる。と同時に、山崎さんの顔が少し驚いたような顔になった。

どうやら私の服装に驚いているようだ・・・仕方ないですね・・・

私は次に近くに居た、近藤さんの元へ行った。

「近藤さん、朝ですよ。起きて下さい」

山崎さんと同じように起こすと、近藤さんは難なくすんなりと起きてくれた。

「おはよう、弥和・・・さ・・・ん・・・」

近藤さんも驚いている。そして、いきなり両肩を掴まれ、誰にされたんだ？と聞かれた。

「こ、近藤さん・・・肩・・・痛いです・・・」

痛みに顔を歪めながら言うと、近藤さんはハッと我に返った様子で肩から手を離してくれた。

そして、すまない、と謝られた。・・・この服のせいで皆さんに迷惑が・・・

いえいえ、と笑顔で返して、次に近い沖田さんの元へと行った。

「沖田さん、朝ですよ。おきてくださあつ!？」

沖田さんを軽く揺すっていると、いきなり腕を掴まれ、ベットに引き寄せられた。

綺麗で整っている顔が真近くにあり、思わずドキドキしてしまう。

だけど、沖田さんの目は開かれる事無く、どうやら寝ぼけて引きよせたようだ。

私は沖田さんから離れようと足掻いた。が、手を掴まれて離れられない。

私は諦めて、沖田さんを再度揺すった。が、どうも起きない。

最終手段を使うか・・・と溜息をつきながら、私は沖田さんの耳元である言葉を言った。

「沖田さん、甘味を用意してますから起きて下さい」

そう言うと、沖田さんの目はぱちりと開かれ、凄い勢いで沖田さんは起き上がった。

そしてキョロキョロと辺りを見渡している。・・・甘味パワー凄し・・・

「おはようございます、沖田さん。朝ごはんの用意できてますので、リビングに行って下さい」

腕が解放されたので、私はにこりと沖田さんの横で立ち上がって挨拶した。

「おはよう、弥和さん・・・なんだか凄い格好だね。誘ってるの?」
くすくすと笑いながら私をからかってくる沖田さん。私はその言葉に顔を赤くした。

「ち、違いますからっ!・・・私をからかう暇があるのなら、早く

「ご飯を食べて下さいっ！」

そう言っと、沖田さんはチエつと頬を膨らませながら寢室を出て行った。

最後は土方さんだ・・・なんだ、この絶望感は・・・私は未だ起きていない土方さんの元へと行った。

「土方さん、起きて下さい。朝ですよ」

軽く揺すりながら土方さんの寝顔を見ていた。なんだか無邪気な少年のような寝顔。・・・鬼って言われても、寝顔はやっぱり違うんだなあ・・・

そう考えていると、なにやらまた布団の中に引き寄せられた。

土方さんの顔が真近くにあり、再び私の顔は赤くなった。・・・朝は騒がしいなあ・・・

「土方さん・・・あ、あそこに芹沢さんが」

そう言っと、土方さんは目を思いっきり見開いて周りを見渡していた。

どうやら成功したらしい・・・よし、芹沢さん作戦は今後も使わせてもらおう。

朝ご飯

「まったく・・・目覚めのわりい朝だぜ・・・」

そうぶつぶつ言いながらご飯を口に掻きこんでいる土方さん。

目覚めの悪い朝、だなんて言われ、私は少し嫌な気持ちになった。

・私だって、好きで起こしてるわけじゃないのに。

もやもやとした黒い物体が私の中で浮いてくる。が、頭をぶんぶん
と振ってそれを振り払った。

別に、土方さんに言われたって気にしないもんね・・・

溜息をつき、私は既に空になっているお茶碗を回収し、お盆の上に
乗せて台所へと持っていった。

その後、お茶を入れて皆に渡し、私は台所に戻って洗い物をしてい
た。

リビングと台所は繋がっているので、会話が筒抜け。だから、面白
い場面では、ついくすりと笑ってしまう。

「そう言えば、今日の朝の弥和、大胆だったよなー」

「そうそう、あの格好・・・」

そんな話が聞こえ、私は手を止めた。そして、リビングをキツと睨
んだ。

「原田さん、永倉さん、その話は禁止ですっ！・・・次言ったら、
家から出しますから」

その言葉に反応した原田さんと永倉さんは途端に黙りこんだ。

「全く・・・」

そう言って洗い物を再開し、丁度洗い終わった時に陽気なチャイム
音が聞こえて来た。

玄関を開けると、そこには彼が居た。

「よお、弥和っ！今、暇だろ？どっか行こうぜ」

元気な声で言う彼は幼馴染の朱詩^{しゅうた}。唯一の男友達、だ。

私はどうしようかと迷った。朱詩には彼等の事を言っていないし、

彼等にも朱詩の事は言っていない。

「ごめん、また今度誘って？」

パンつと目の前で両手を合わせ、朱詩を見た。

朱詩は予想外の答えが来た事で驚いたのか、なんだか残念そうな顔を
をしている。

「んー・・・忙しいのか？」

「いや、忙しいわけじゃないけどさ・・・」

「ならいいじゃねえかつ！」

「いやいや、私用事あるし」

「んなのどうにでもなるってっ！」

「ならないからっ！絶対にならないからっ！」

「そんなの分かんねーじゃん？」

「朱詩ってさー、しつこいってよく言われない？あ、やっぱり？言
われるんだー」

「いや、俺なんも言ってねえしっ！」

「朱詩の声なんて聞きたくないし？」

「ひでえ」

「あははっ・・・久しぶりに朱詩と話したなー」

「んー、確かに・・・俺も弥和の声が聞けたし、帰っかなあ」

「最初っから帰つとけばよかったのにね」

「弥和やつぱひでえよ・・・んじゃ、な」

「んー、バイバーイ」

一連の会話をし、私は扉を閉めた。朱詩は元気そう。

ホッとしながらリビングに帰ると、なんだか重たい雰囲気だった。
・・・どうしたんだろう。

「あの・・・えっと・・・どうしましたか？」

首をかしげながら聞いても、誰も答えようとはしない。あの沖田さ
んでさえも、笑顔では無い。

「・・・私、何かしましたか？・・・」

不安そうに聞くと、不意に斎藤さんが私をじっと見て来た。・・・

え、なに？

「・・・あいつとお前は恋仲なのか？」

その言葉が聞こえ、視線は一斉に私へと集まった。斎藤さんの言うあいつとは、朱詩の事だろう。

恋仲と言うのは・・・きつと恋人の事。・・・つまり、私と朱詩が恋人かどうかを聞いてるって事？・・・

私はつい可笑しくて笑ってしまった。

「私と朱詩はただの幼馴染ですよ・・・恋仲なんかじゃありませんから」

くすくすと笑いを交えて言うと、重たかった雰囲気はふんわりと軽くなった。

床を見ていた沖田さんが笑顔になり、私をじっと見て来た。

「・・・何処か、行きますか？」

私にこりと微笑みながら皆に話かけると、皆は一斉に頷いた。

「じゃあ・・・服、出しますから、ちょっと待っというて下さい」
私はリビングを出て両親の部屋に行き、人数分の服を用意してリビングへと戻った。

お出かけ

「弥和はその格好で行くのか？」

そう原田さんは聞いてきた。私はこれが精いっぱいの償いなので、こくりと一度頷いた。

まあ、上着くらいは着るけどね・・・と思いながら、私は財布と携帯を持って玄関に行った。

父親は靴を集めるのが趣味なので、靴は有り得ないほど沢山ある。

「どれでも履いて下さって結構ですから」

にこりと笑って言うと、皆はそれぞれ苦労しながらも靴を履いていた。

全員が履けた事を確認すると、私は決めごとを言った。

「外に出ている間、貴方達は壬生浪士組では無く、ただの一般人です。偉そうにするのは禁止。女の人に手をあげるのも禁止。勝手に別行動も禁止。怪しまれる行動も禁止。・・・それと、困っている人が居れば助けてあげる。女の人なら尚更。ね？」

そう言うと、皆は渋々頷いた。それをまた確認し、私は玄関の扉を開けた。

「あ、そうそう・・・名前を聞かれたら偽名を使ってね。・・・この際、凄い名前でも良いから」

私は何処に行きたいか、と皆に聞いた。すると、真つ先に手をあげたのは原田さんと永倉さんと沖田さん。・・・沖田さんは、甘いものが食べれる所とか、そう言う系かなあ・・・

「俺は島原っ！島原にいきたくぐっ」

無言で原田さんの口を押さえた。押さえるのには・・・背伸びして・・・なんて背が高いんだ。

「原田さん・・・今は真昼間。それに・・・女の前でそれを言うのは禁止、ですよ？」

キツと原田さんを睨みつけると、原田さんは苦笑しながらも頷いた。

私はそれを見て原田さんから手を離れた。そして永倉さんを睨んだ。きっと永倉さんも同じような答えだと思ったから、先手を打っておかないと、ね……。

永倉さんは苦笑しながら場所は提案しなかった。……やっぱり……どうして男はこうなのだろうか。

私は溜息をつきながら沖田さんを見た。沖田さんの目はきらきらと輝いている。

「僕は甘味が沢山食べられるところに行きたいなあっ！」

……やっぱり、ね……。……私は予想が的中した事に、少し苦笑してしまった。

「はい、他に提案ある人——」

そう言っただけの方を見るが、誰も手をあげようとはしない。……え……

「んじゃ、遊園地でいいや。……確か近くに新しく出来てたんだよね……。」

そう言っただけ、私は行きますよーと声をかけて前に歩いた。

観覧車が少し遠くに見える。それを目指して行けば、きっとつくだろう。

それにしても、今日の晩ご飯は何かいいかなあ……。やっぱりカレー？……。でもカレーか……。……

一人で黙々と考えていると、不意に私の手が何かに包まれた。

横を見ると、そこには笑顔の沖田さんが居た。手を見ると、沖田さんと私が手を繋いでいる形になっていた。

別にそれほど嫌でもないの、私は沖田さんと他愛もない会話をしながらゆっくりと足を進めて行った。

遊園地

「お、きた・・・さんっ!・・・速いですっ・・・」

今、私は沖田さんに手を引っ張られて遊園地内を駆けまわっているところです。

沖田さんは子供のようにはしゃぎ、私は沖田さんの保護者役。

遊園地についても手を握っていたためか、別行動を言われた時は何故だか必然的に私と沖田さんがペアになってしまった。

そして、沖田さんとぶらぶら歩いていると少し向こうにアイスクリーム屋さんが見えた。

その時、沖田さんのめがきらんと光ったのを私は知らず、思いつきり手を引っ張られて今に至る。

やつとのこと着いた時には、私はへとへと。沖田さんはきらきらと輝いた目でアイスクリームを見ている。

私はチョコ味のアイスを頼む沖田さんを見て、少し笑みを漏らした。そして、アイスクリーム代を払い、暫く二人でまたぶらぶらしていた。

その時、近くで女の人の嫌がる声が聞こえた。・・・ああ、これはナンパかな。

そっちをちらりと見ると、そこには可愛い女の子が居た。数人の男に絡まれて、何となくヤバそう。

私は沖田さんに少し待っているように言い、女の人の方へと行った。

「やめてくださいっ!・・・離してっ!」

「俺達と遊ぶって言えば離してやるよ」

なんとも鬱陶しい言い方に、私は少しキレてしまった。

女の子の手を掴んでいる男の手を蹴りあげると、女の子を逃がしてあげた。

途端に標的が私に変わり、男達はにやにやとしながら絡んでくる。・・・ったく、男は何処もそう言う感じなのかね。

私は溜息を一つつくと、男に回し蹴りを決めた。周りの迷惑になるので、あまり吹っ飛ばないように力を加減してね？

「女の敵は私の敵・・・これ以上やるってんなら、手加減しないよ？・・・アンタ達の大事な物、一生再起不能にしてあげるけど？」
フツと鼻で笑って言うのと、何を思ったのか男達は一目散に逃げて行った。

私は沖田さんの元に戻ると、すいません、と一言だけ言った。

「凄いですね・・・なんかかつこよかったですよ」

にこにこ笑顔で言われ、私は顔が熱くなるのを感じた。・・・力ツコいい、だなんて言われてもあまり嬉しくないのだが・・・

暫くして、私達は他の人達と合流して帰る事になった。

楽しめた今日の思い出は、私の心の中に大事に仕舞われた。・・・一つ一つ、増えていく思い出をどれだけ残せるのだろうか・・・

疑問

「やっぱり夜は暇ですねー・・・なんかする事ありませんかね・・・」

「

そう言つて、辺りを見渡すと、既に土方さん以外の人は寝ていた。

今日は久々に遊んだからなー・・・と寝顔を見ながらくすりと笑うと、不意に土方さんと目が合った。

「土方さんは寝ないんですか？」

そう言つと、土方さんは「ああ」と短く返事をしてそっぽを向いた。

・・・やっぱり嫌われちゃってる？

「晩ご飯、何食べますか？・・・」

土方さんに話しかけても、反応は無かった。そつと顔を覗くと、瞼が下に落ちている。

鬼の副長と言われていても、寝顔は可愛いんだなあ、とついくすりと笑ってしまった。

そして部屋の電気を消し、私は部屋を出た。・・・あれ、ここつて私の部屋だったよね？・・・

階段を下りてリビングでテレビを見ていると、外から何かが聞こえる。

かつん、かつん、と窓に小石が当たる音がし、私はカーテンを開けて外を見た。

そこには小石を窓に投げている朱詩の姿があり、私は玄関の扉を開けて朱詩の元へに行った。

「朱詩？どうしたの？」

私が朱詩に話しかけると、朱詩は驚いたようにこつちを見て何故だか戦闘態勢をとった。

「何してんのよ・・・安心して、今日は何もしないであげるから」

呆れ顔で溜息をつく、朱詩は安心したように戦闘態勢をやめた。

・・・なによ、まるで私がいつも何かをしているようじゃないの・・・

いや、してるけどさあ・・・

「んで？・・・用件は？」

腕を組んで言うと、朱詩は思いだしたように掌をぼんと打った。
・・・忘れてたの？

「今から俺の家で花火するんだけどさあ、弥和も一緒に参加しねえか？」

花火、という言葉に思わず反応してしまった。そして、するっ！と言いかけたが、彼らの存在を思い出した。

寝ているとは言え、起きたら何を仕出かすか分からない。まあ、大人しくしてくれると信じているが・・・

「ごめん、やめとくわ」

にっと笑って言うと、朱詩はいかにも不満げな顔でえーっと言った。

「今日の弥和ノリわりい・・・何かあったのか？」

不満げな顔は一変し、今度は心配そうな顔で聞いてくる朱詩。・・・百面相だね。

「何もないし・・・そう言う朱詩も何かあったでしょ？・・・何となく楽しそう」

くすくすと笑って言うと、朱詩は顔を真っ赤にさせて動揺したように顔を何度も横に振っていた。

「その様子じゃあ・・・春華先輩と付き合う事になった・・・とか？」

そう言うと、朱詩の顔はますます赤くなっていた。凶星・・・朱詩って分かりやすいなあ。

「とりあえず、私は参加しないからね。んじゃ」

そう言い、軽く手を振って玄関に向かった。朱詩が後ろで何かを言っているが気にしな～い。

かちやりと玄関を開け、靴を脱ぎ前を向くと、寝ていたはずの斎藤さんが起きていた。

「おはようございます・・・？」

夜なのにおはよう、は可笑しいか。と言ってから思うが、斎藤さん

は何も言わずにただじーつと私を見ている。

「・・・あ、晩ご飯ですか？・・・今から食材買いに行きますけど、何か食べたいも」

「飯はいらない」

私の言葉が遮られ、視界には斎藤さんの顔のアップが。腰に回された手と斎藤さんの髪が私の頬を擦くすくっている。

これは・・・斎藤さんに抱きしめられた？・・・え、なんで？

一人であわわわしていると、不意に斎藤さんの手の力が強くなった。微妙に痛いかもしれない。

「さ、斎藤さん？・・・どうしましたか？」

「あの男はお前にとつてどんな存在だ・・・？」

質問には答えてもらえず、間髪いれずにむしろ質問された事によって私の頭の中は少しパニックだった。

私に取って朱詩はどんな存在？・・・いや、ただの幼馴染じゃね？

「た、ただの幼馴染ですよ・・・」

そう言うと、斎藤さんはスツと離れてくれた。でも、その顔は少し悲しそうな顔。

「・・・今の時代は、幼馴染と他の男では態度を変えるものなのか・・・？」

・・・何となくだけど、斎藤さんの言いたい事が分かってきたかもしれない。

斎藤さんが言いたいのは、自分達と朱詩との態度の違いだろう。敬語とため口とか・・・

「変えるのは人其々じゃないでしょうか？・・・分かりませんが・・・」

私の答えに、斎藤さんは「そうか」と一言だけ言って去っていった。・・・なんだろう・・・やっぱ敬語は駄目かなあ・・・

「やっぱり分からないや・・・」

私は心の中にあるもやもやを振り払うかのように頭をぶんぶん振った。

そして、朝ご飯を買いに財布と携帯を取り、メモに買ってくる事を書いてリビングの机の上に置いた。

玄関の扉を開け、涼しい風を全身に浴びながら私はスーパーへと向かった。

「ちょ・・・離して下さい・・・」

スーパーから帰る途中、私は何か怖い人たちに絡まれてしまった。男と女の力の違いは分かる。だからこそ、回し蹴りを炸裂させたいのだが・・・どうも足を掴まれて出来ない。

「いいじゃねえか、少しくらい遊んだつてよお」

にやにやにやにや。ずっとにやにやしかしていない男達に絡まれるのはどうも気分が良くない。

私は意を決して、スーパーの袋を振りまわした。足を掴んでいる男の腹に取りあえず当たった。

男が腹を押さえて蹲ったので、足が解放された。私はそのままの勢いで近くに居たなんか手を掴んでいる奴の大事な部分を思いっきり蹴りあげた。

良い反応を見せてくれて、ありがたい。と一人で笑いながら残りの奴らも相手にした。

その時、足を払われてバランスを崩し、思いっきり地面にこけてしまった。ああ、大失敗・・・

立ち上がろうとすると、上に乗られて服に手をかけられる。勿論、抵抗しないように両手足を押さえられて。

こりや無理だな、と私は思いキツと男を睨んだ。そして男が服を剥がそうとした時、遠くからパトカーの音が聞こえた。

男達は慌てて何処かへ行き、私は服を直して家に帰った。パトカーはどうやらただの見周りのようだ。

「ただいまあつ!？」

玄関の扉を開け、靴を脱ぐと同時に前から誰かに飛びかかれた。

見ると、それは凄く心配そうな顔をしている沖田さん．．．どうやら心配をかけてしまったようだ。

「弥和さん、何処へ行つてたんですか．．．？．．．」

安心でか、今にもなんだか泣きそうな顔の沖田さん。私は絡まれた事以外の経緯を話した。

沖田さんはそれで納得したようで、甘味をくださいと無邪気スマイルで言ってきた。．．．甘味よりご飯のように．．．

はあ、と溜息をついて私は荷物を台所に置きに行った。冷蔵庫を開け、食材達をいれてお菓子ボックスを持ち、沖田さんの元へ。

「ど、うぞ．．．」

あまり力が残つてなかった私は、お菓子ボックス持ちに全ての力を使いきった。ので、なんだか死にそうだ。

「ありがとうございますっ！．．．弥和さんもうぞ」

にこりと笑つてお菓子を差し出してくる沖田さん。もともと私のお菓子なんだけどなー、と一人で内心笑いながらお菓子を受け取った袋からお菓子を出し、口に含んだ。甘さが口いっぱいに広がり、私は思わず笑顔になった。

そんな私を何故か沖田さんはじーっと見ている。．．．なんだろう。何か変な事したかな．．．

「どうしましたか？．．．」

そう言つて沖田さんに聞くと、沖田さんは顔を少し険しくして私の手を指差した。

「手が震えてますけど．．．どうしたんですか？」

そう言われ、自分の手を見ると確かに小刻みに震えていた。．．．どうしたんだろう。

自分でも分からないため、私は適当に誤魔化して沖田さんを半ば無理矢理納得させた。

沖田さんはお菓子を食べて満足そうにし、部屋へと戻って行った。すると、私の手の震えは止まり、私はホッとしながら歯を磨いて両親の部屋へと行った。

「・・・なんだか今日は色んな事があつたなあ・・・」

私はベットにダイブして、頭の中で一つ一つ整理をしていった。暇だからと遊園地に行き、朱詩が春華先輩と付き合う事になり、斎藤さんに抱きしめられ、ヤンキーらしき人達に絡まれ、沖田さんとお菓子を食べた。・・・斎藤さんに抱きしめられたのが一番驚きかな。

私はベットの近くにある電気を消し、目を閉じた。

戻り

夢を見た。・・・沖田さん達が元の時代に帰る夢。

私が止めても、沖田さん達は儚く笑うだけで・・・足を止めようとはしない。

光が徐々に近づいてきて、沖田さん達を徐々に包んで行く。

私を手を伸ばしても、光に触れても、沖田さん達の元へはいけなかった。

「・・・っはぁ・・・」

思いつきり目を開け、私は目覚めた。

体は汗だけで、暑さのせいだけではないと思った。

かちやりと扉を開け、冷たい廊下を歩いた。・・・何かが違う。

シーンとしているのはいつもの事。だけど、何かが違うんだ。

私は速度を速めながら、自分の部屋へと足を進めた。

「・・・どうして？」

部屋の扉を開けると、そこには何の変哲もない私の部屋が広がっていた。

そう、何も変わっていない。物の配置、プレゼントされた物・・・

何にも無くなったりはしていない。

だけど、・・・だけど、私の中にあつた幾つもの者が消えた。・・・

彼等がいない。

ベットの上を見たって、机の近くを見たって、部屋の隅を見たって・

・・・彼等の姿は見えなかった。

嗚呼、正夢か・・・と私は苦笑し、ぼろぼろと目から零れる涙を袖で乱暴に拭った。

元々、彼等はこの時代の人では無い。いきなり私の家に来たのだから、いきなり帰るのも仕方がない。

ぽっかりと胸に開いた穴をどうにかすべく、私は着替えて家を出た。

向かったのは、朱詩の家。・・・朝早くからは流石に失礼かな。

私は朱詩の家の前で足をとめた。そして、くるりと方向転換して自分の家へと戻った。

がちやり、と玄関を開けても何も変わっちゃいない。

シーンとしているリビングで、静かにご飯を一人で食べた。

味は感じられず、ただ彼等の事しか頭になかった。

もやもやが頭から離れず、ついには箸を持っている手も止めてしまった。

「あー、もう・・・知らない。もうどーでもいいや」

私は若干イラつく自分の気持ちを抑え、茶碗と箸を水につけると部屋に早足で帰った。

「なあ、英紀が幼いころの自分を思い出すシーンって何巻だった？」
朱詩の質問に私は答える事もなく、ただ空をじつと見つめていた。
真昼間から男が部屋に来るのはあまり嬉しくない。それが幼馴染だと尚更だ。

ごろごろとせつかくの休日を満たしたいのに、誰かに来られると気を使わなくてはいけない。

私は一つ溜息をついて私の漫画を読み漁っている朱詩に目を向けた。
楽しそうで何の悩みもなさそうな彼。笑顔以外の顔をまるで知らないかのような表情。

それは、もうすでに帰ってしまった彼に似ている。

「っていうかさ・・・朱詩、何しに来たわけ？」

私は訝しげな表情で目の前にいる朱詩を見た。

朱詩は私を一度みると、また漫画に目を戻した。そして、口を開く。

「春華先輩がさあ、俺の家に来るんだけど・・・緊張しちまってさあ」

「今すぐ帰れこの野郎」

私の家は緊張を解す場所じゃないんだぞ、と朱詩を睨んで吠えた。

朱詩は苦笑しながらも漫画を閉じ、私の頭を一撫でしてから部屋を出ていった。

ボタン、と下から扉のしまる音がして、朱詩が帰ったのだと分かった。

私はベットに寝転び、また窓の外の景色を眺めていた。

蝉の鳴き声が聞こえる。

妙な機械の音はせず、室内の温度も涼しいとは言えない。

ゆっくりと瞼をあげ、重たい体を起こした。

周りを見渡し気付いた事は――

「・・・帰って来たんですね・・・」

彼女の部屋では無い。畳の床とちりん、と風を受けて鳴る風鈴が何よりの証拠。

ここに帰って来たのは僕だけじゃ無い。

どたどたと廊下から聞こえる足音が彼のだと分かった時に、部屋の襖が勢いよく開いた。

「・・・総司も帰ってきたんだな・・・」

部屋の手前にいるのは平助。顔からは寂しげな気持ちを読み取れる。僕はくすりと笑って、不思議そうな顔になった彼を見た。

「彼女から離れるのはそんなに嫌かい？」

そう言つと、見る見るうちに彼の顔は赤くなっていった。

「ち、ちげえよっ！」

必死で否定する所、それは肯定しているのと一緒にだと彼は気付いていない。

だから嘘をついていても分かる。

「ふうん・・・平助って素直だよな」

平助は素直。でも、その素直さが時に仇となって帰ってくる。

僕に言われたのが氣にくわなかったのか、平助は不機嫌そうな顔をした。

「沖田さん、藤堂さん、副長が呼びです」

上から聞こえた声、それは彼も此処に戻ってきたという証拠。

僕と平助は同時に上を見上げた。

と同時に背後の気配に察知できた。どうやら彼は移動したようだ。

「分かったよ・・・平助、行くよ」
平助は一度頷いて、僕はそれを確認した後、自分の部屋から出た。

幕末 - 藤堂 - side

「平助ええええっ！」

「ぐえっ」

腹の辺りになんとか重いものが乗った。

それと同時に、なんだか残念そうな声も聞こえた。

「さ、左之さん・・・おも・・・い・・・」

途切れ途切れに発した言葉は、上に乗っている人物、元い左之さんに届く事はなかった。

そろそろ息がやばい、という所で畳に何かがグツサリと刺さった。

朦朧とする意識の中で、ぼんやりと見えたそれはクナイ。文付きだ。左之さんはクナイに目がいき、やっと俺の上から退いてくれた。

「なんだあ？・・・」

乱暴にクナイから文をとり、がさがさと開いて内容を見た左之さん。さっきまで浅黒かった肌は見る見るうちに蒼白へと化していく。

ぐしゃり、と片手で文を握りつぶすと、左之さんは一目散に部屋から出て行った。

俺は重たい体を起こし、ぐると辺りを見渡した。・・・明らかに未来の部屋では無い。

屯所に、幕末に帰って来たのだと認識すると同時に、心の中で何やらもやもやが出来始めていた。

もやもやに気づくと共に、脳裏にアイツのふんわりとした笑みが浮かんだ。

「・・・総司も帰ってきてんのかな」

ふらふらと右へ左へ傾く体で俺は部屋を出た。そして、総司の部屋へと向かって足を進める。

総司の部屋の前につき、俺は勢いよく襖を横に滑らせた。そこにいたのは上半身を起こしている総司の姿。・・・ああ、帰っ

てきたんだな。

俺の方を向く総司。その顔は何処か憂いを帯びていた。

「・・・総司も帰ってきたんだな・・・」

不意に心で思っていた言葉が口から漏れ出した。

その言葉に総司はくすりと笑って、俺の目を見ながら口を開いた。

「彼女から離れるのはそんなに嫌かい？」

それを聞いた途端、総司を殴りたい衝動に駆られた。

と同時にアイツの顔がまた浮かんできた。顔が徐々に熱くなってゆく。

「ち、ちげえよっ！」

必死に否定する、が総司は俺の否定を聞き入れない。

これが肯定しているのと同じような事だと俺はわかっている。だけど、俺の性格上、否定せずにはいられない。

「ふうん・・・平助って素直だよな」

その素直さが仇になるときがある、きっと総司は心の中でそう思っているはずだ。

俺は総司に言い返そうと口を開こうとした。その時、不意に上から気配を感じた。

「沖田さん、藤堂さん、副長が呼びです」

総司でも俺でもない聞きなれた声。ああ、アイツも帰ってきてたんだ。

俺は天井から総司に目を向けた。すると、天井から気配は消え、代わりに総司の後ろにアイツが立っていた。

「分かったよ・・・平助、行くよ」

俺はこくりと頷いた。それを合図に、俺と総司とアイツは総司の部屋を出た。

幕末 - 山崎 - side

「……ん……さん……」

薄らとする意識の中で誰かが自分に話しかけてくる。

声からしてアイツではないと認識し、わいは目を開けなかった。

「……ざきさん……山崎さん」

少しだけ聞き慣れた野太い声と共に体を軽く揺すられる。

仕方なく目を開け、ぼやあっとしか見えない人物に目を凝らした。

「山崎さん、副長が呼びです」

それは同じ監察の島田さん。少しだけ蒼白した顔になっている……？

島田さんは体格が良く、気弱だけでも人懐っこい性格。

わいとは真反対、だからよく意見がぶつかったりもする。

「……」

だるい体を起こし、畳の床に目をやった。

島田さんがいる時点で殆ど確定だった。けど、ほんの少し……心のどこかで希望を持っていた。

だが畳の床にその希望を簡単に壊されてしまった。

島田さんはもう一度副長が呼びです、と言うと、そそくさと部屋を出て行った。

それと同時に屋根裏へと飛び、副長の部屋へと向かった。

「……副長、ご用は何でしょうか」

すたり、と屋根裏から飛び降りると副長は『いつもの』副長の顔でわいを見た。

「多分他の奴らも帰ってきている。……呼んでこい」

一見『いつもの』声に聞こえる。が、わいの耳は騙せない。
「御意」

そう呟くと再び屋根裏に帰った。

「永倉さん、原田さん、藤堂さん、副長がお呼びです」

永倉さんは既に起きていて、部屋には原田さんと藤堂さんが居た。三人はすくつと立ち上がってすたすたと早足で部屋を出て行き、副長の部屋へと向かった。

・・・否、二人。藤堂さんは副長の部屋とは反対の方向に足を運んでいる。

そんな事を気にかける暇は無いので、理由は聞かずに三度目となる屋根裏に行った。

「彼女から離れたのはそんなに嫌かい？」

沖田さんの部屋に行った時、不意に沖田さんの楽しそうな声が聞こえた。

疑問形からして、誰かに話しかけているのだろうと判断した。

「ち、ちげえよっ！」

藤堂さんの声が聞こえ、あの時沖田さんの部屋に行ったのだと分かった。

何やら色々と雑談しているところに入るのは少し悪いが・・・今はそんな事を言っていられない。

微量の気配を出すと二人は気付いたようで、少しだけ顔が鋭くなった。

「沖田さん、藤堂さん、副長がお呼びです」

素早く屋根裏から沖田さんの背後に回り、それだけを伝えた。

途端に部屋の空気が少しだけ変わり、沖田さんと藤堂さんは副長の部屋に行った。

四度目の屋根裏は流石に勘弁、とわいは歩きで副長の部屋に向かった。

ボーッと部屋の中央に置かれているソファに寝転がり、部屋の天井を視界に映す。

頭の中で思いだされるは、短くも楽しかった日々。・・・ってなんだ、私死んじやったみたい。

勝手に流れ始めた走馬灯を半ば強制的に終了させ、台所に目を向けた。

・・・唐揚げをみんなで食べた時、まるで家族のように感じたのは私だけなのかな・・・

第二の走馬灯が流れ始めようとした時、私は一つの考えを思いついた。

考え・・・というより、サプライズの様な類。

「近藤さん達が帰って来た時の為に・・・もうちょっと料理のレパートリーを増やそうっ！」

そう・・・私の考えは、今、口に出した通りの事。

実のところを言うと、私が作れる料理は数が限られている。

彼等が居たのは短い期間だったので、ぐるぐると無限ループを回らなくて済んだが・・・

今後、そんな事が無いように。皆に、彼等に、美味しいと言ってももらえるように。

私はぱちんと頬を両手で挟んで気合いを入れた。そして、台所へと足を進めた。

「よしっ・・・作るかぁ」

白いエプロンを着用し、頭には三角巾。準備完了だ。

目の前には鮮やかな色をした野菜類と薄ピンク色の肉類、それに味付けの調味料類がある。

今回作るのは、男のハートをゲットするにはもってこいの料理、肉

じゃがである。

慣れないパソコンを利用しながら私は淡々と下拵^{したごしらえ}を進めていく。意外と簡単に出来るものだなーと感心しながら、クライマックスへと入った。

そうこうして出来た初めての肉じゃが。・・・見た目は普通、だが問題は味だ。

菜箸で恐る恐る掴み、ぱくりと口の中に含んだ。

ふわりと口の中で広がる味は至って普通。お袋の味とか、そんな立派な味では無かった。

でも、失敗していない事にホッとしつつ、次の料理へと取りかかった。

「・・・よし・・・一応、これで完成・・・」

ちよこりと端っこに人参を添え、第二の料理、オムライスは完成した。

黄色い卵が極々普通にご飯の上に乗せられているだけの極々普通のオムライス。

テレビとかでよく見るのは、真ん中に切り込みを入れると光り輝く卵がこんにちわをする凄く美味しそうなオムライス。

だけど、初めて作るオムライスにそんな高度な技を使えるわけもなく、私のオムライスは極々普通に終わった。

「・・・高度な技はまた今度！よし、次！」

光り輝いていないオムライスを見ていると何だか泣きそうになってきた。ので、私は次の料理へと取りかかった。

「んー・・・これなら共通で食べられるかなあ」

目の前に置かれた微妙に形が崩れている『珈琲アイス』を見て、私は首を傾げながら呟いた。

珈琲アイスは催促されるほど皆に好かれている。だから、これなら皆で一緒に食べられるのでは？と思った私は珈琲を何故かあったプ

リンの容器に入れ、冷蔵庫に少しの間眠らせた。

そして出来上がったのが、少しだけ溶けている目の前の珈琲アイス。ドキドキしながらスプーンで掬い、また恐る恐る口の中へと含んだ。ひんやりとした感触が下伝いに口の中で広がり、それと共に珈琲の味もしてきた。

どうやら成功したようだ。

ホツとし、余分に作ってしまった珈琲をどうしようかと私は少し考えた。

その時、ポフンっとリビングの方で小さな爆発音らしきものが聞こえた。

「・・・」

「・・・」

無言で顔を見合わせる新撰組の皆さんと私。

あの後、リビングへ向かった私は少しだけ硬直してしまった。

なぜなら、そこには帰った筈の新撰組の皆さんが同じように硬直しながら部屋を見渡しているからだ。

しかも、皆さん業務中だったのか・・・其々の格好をしている。

私はつい、持っていたスプーンを床に落とした。

かしやーんと鳴った音で、彼等は一斉に刀の柄に手をかけたが、その先に私が居ると気付き、刀を抜く事はなかった。

そして、先程に戻る。

私は嬉しさのあまり、声が出せなかった。

新撰組の皆さんが帰ってきた事、また彼等と此処で過ごせる時間が増えたこと・・・もしかしたら直ぐに帰ってしまうかもしれないけれど・・・彼等の顔を再び見れただけでも嬉しい。

「お・・・かえり、な・・・さい・・・」

途切れ途切れに発した言葉。と同時にぼろぼろと目から零れ落ちる涙。

嬉し涙。なのに、彼等は何かを勘違いして私から顔を逸らした。

・・・なんだか胸がズキズキと痛む。

私は乱暴に手の甲で涙をぬぐい、にこつと笑つてもう一度おかえりと言った。

でも、沈黙は破れない。・・・これは私から破った方がいいのかな？
そう考えている所に、ぴんぽーんと毎回お馴染の陽気なチャイム音が聞こえた。

ぱたぱたと玄関に向かい、扉を開けるとそこには朱詩が居た。・・・
大体予想はできたんだけどね。

「よお弥和。・・・なんだかやけに嬉しそうな顔だが、何かあったのか？」

朱詩の言葉に私は少しだけ唖った。・・・朱詩にバレルとは一生の不覚。

「え、あ、うん。まあ色々と・・・というより、用件は？」

今は一分一秒でも彼等と居たい。・・・沢山話したい事があるのに
帰られると困るからねっ！

「いやあ、久々に弥和の顔が見たくなっただ」

朱詩が全てを言う前に、ぱたんつと玄関の扉を閉めた。

そして、チェーンをかけて再び玄関の扉をギリギリまで開けた。

「用件を簡潔に三十文字以内、十秒以内でお話し下さい」

そう言うと、朱詩は慌てたような顔になった。

「ちょ、意味わかんねえ」

「いーち、にーい、さーん、よーん」

口で数え始めると、朱詩は尚更慌てている。

「弥和、今日どっか遊びに」

「行かない。じゃあね」

そう言つてばかりと扉を閉めた。外で何か朱詩が嘆いているけど気にしなーい、気にしなーい。

私はリビングへと戻り、にこにことした顔で三度目のおかえりを言
った。

出来た溝

「・・・」

彼等が帰って来たのはいいものの、沈黙は勘弁してほしい。

部屋の中の空気はどんよりしていて、誰ひとり喋ろうとはしない。

自分が喋れば済む話なのだが、生憎、私はこの空気を破る程の勇氣を持ち合わせていない。

ので、とりあえずテレビに任せてみた。

【次のニュースです】

アナウンサーが喋る中、誰もテレビを見ようとはしない。

どうやらテレビ作戦は失敗に終わったようだ。

私は小さな小さな溜息を一つだけつき、着替える為にリビングを出た。

「買い物行ってきますね」

リビングの扉を少し開け、未だ沈黙が続いている部屋に声をかけた。

誰も何も反応してくれないので、それを無理矢理肯定と受け取り、

私は家を出た。

外に出てみれば、何故か家の前で朱詩があっちへ行ったりこっちへ

行ったりしていた。

「・・・何してんの？」

苦笑交じりにそう言えば、朱詩は私に気づいたようで凄く嬉しそうな顔になる。

「弥和っ！やっぱ遊びに」

「行かないから。じゃあ」

言葉を遮って朱詩の横を通り抜けた。そして早足でスーパーへと向かう。

その時、そんなあ、とハタレな声が聞こえたけどスルーしておこう。

「すみません、ちょっと良いですか？」

家の前に何故か溜まっているヤンキー達に一言かけ、玄関への道を開けてもらおうとした。

が、開けてくれない。むしろ、邪魔してくる・・・鬱陶しい。どれだけ退いてくれ、と言ってもヤンキー達は退かない。

それどころか何だかニヤニヤした顔つきになってきて、私の足を触り始めた。

私はすう、っと息を吸って覚悟を決め、カッと目を開いた。

「いやあああつ！変態いいいつ！」

近所迷惑、それが今回の狙い。

ヤンキー達は私の声に少し驚いた顔になったものの、だんだんと怒った顔に変わっていく。

たちまち周りを囲まれ、両手を後ろから封じ込まれてしまった。

足は今更な恐怖で震えて使いものにならない。

どうしよう、と必死に考えていると、不意に玄関の扉が音を立てて開いた。

「・・・」

扉の向こうに居たのは今の状況を見て目を見開いている沖田さん。

「・・・何してんの？」

ひんやりと冷たい声と鋭い視線がヤンキー達を捕え、たちまちヤンキー達は動けなくなった。

その隙に、と沖田さんはヤンキー達に一步一步近づいて行く。

逆にヤンキー達は、一步一步後ろに下がって行く。

勿論、私の手を封じていたヤンキーも下がっていくので必然的に私も下がって行ってしまう。

「手、離しなよ」

一段と冷たくなった声を聞いた私は少しだけ恐怖を抱いてしまった。すると、ヤンキーが私の手を解放してくれた。

「早く此处から立ち去って？」

にこりと黒い笑顔をヤンキー達にお見舞いした沖田さん。

ヤンキー達は慌てて何処かへ行ってしまった。

すると沖田さんの目線が私へ向き、沖田さんを見ていた私の目線と絡まった。

「全く・・・目を離す暇もないね」

そう言われたと思うと、淡い藍色が視界いっぱいに広がった。

後頭部に感じる暖かい何か。腰に回された手・・・もしかして抱きしめられてる？・・・

よく状況が呑み込めない私の頭上から沖田さんの声が聞こえた。

「あの日・・・どうして僕に言わなかったわけ？」

あの日・・・と言うのはいつのことだろうか・・・

「お、沖田さんっ・・・と、と、とりあえず中に入りましょ？」

そう言うのと、沖田さんは私から離れてくれた。

ホッとしたのも束の間、次は沖田さんに手を握られ、中へ引っ張られた。

甘え

ばたん、と閉められた扉。そしてまたもや沈黙。

沖田さんはパツと手を離し、深く赤い目が私を捕えた。

「・・・君って馬鹿なの？」

低い声が聞こえ、私の体はびくりと跳ねた。

「そんな格好じゃ絡まれるって分からないわけ？・・・」

呆れかえった声と深い溜息。

私の格好は白のキャミソールに黒のパーカーを羽織り、太股を隠す程度の長さのスカートを履いている。

至って普通なのだが・・・やっぱ駄目だったのかな？

「あ、あの・・・ご迷惑をおかけしてごめんなさい・・・助けてくれてありがとうございます」

ずきりと胸が痛む中、声を必死に絞り出してその場を去った。
声が掠れてたかもしれない。もしかしたら聞こえていなかったかもしれない。

でも、あの場に居るのは耐えられなかった。どうしても沖田さんの顔が見れなかった。

だから私は逃げたんだ。一人になれる場所に。自分の部屋に。

「・・・なんで朱詩がいるわけ？・・・」

部屋に帰れば、そこには見慣れた人が一人いた。

朱詩は本から私に視線を移すと、にかつと無邪気な笑顔を見せた。

「いやー、弥和が帰ってくるまで此処に居ようかなーって」

いやいやいや、此処に居ようかなーじゃないでしょ・・・

「これ不法侵入じゃ無い？・・・」

そう言っただけで私は携帯を手に持った。

途端に朱詩の顔は一変し、すっごい慌て始めた。

警察に電話するわけでもないのにこの慌て様・・・

私は思わずくすくすと笑ってしまった。

朱詩は私が笑ったのを見て、動きをぴたりと止めた。

「・・・な、なによ・・・」

じーっと顔を見られ、思わずたじろいでしまう。

すると朱詩は再びにかつと無邪気な顔を見せ、本をぱたりと閉じた。

「いや、弥和の笑った顔、久しぶりに見たなーって」

そう言われ私はハツとした。

朱詩に会えば、どうしても疲れた顔をしてしまう。

それは何故だかわからないけれど・・・

私は朱詩の隣に座り、朱詩の顔をじつと見て口を開いた。

「・・・笑顔を見たい時・・・どうすればいいかな？」

いきなりの問いかけにも朱詩は笑顔を崩さずに答えてくれた。

「普段、俺に接してる様な感じで接すれば・・・？」

朱詩に接してるように接する？・・・

私はありがとう、と礼を言つて朱詩を追いかえた。

朱詩は潔く帰ってくれた。・・・変な感じ。

私は朱詩を見送った後、時間を見てリビングへと足を運んだ。

「弥和君っ！大丈夫だったかい？」

リビングの扉を開けた途端、近藤さんが私に飛びついて来た。

受け身を取れず、私は近藤さんと共に床へと倒れた。

「大丈夫だよ。・・・心配かけてごめんなさい」

重さに耐えつつも私は敬語を外して答えた。・・・朱詩の時はタメ口だからね。

近藤さんは少し驚いた顔をしたのちに、そうか、と優しい顔になった。

近藤さんに上から退いてもらうと、私は台所へと行った。

「よし・・・今日は肉じゃがにでもしようかな」

皆が帰って来た時のため、練習した肉じゃが。

私は肉じゃがの調理に取りかかった。

「一人一つは感想を言う事。それと・・・苦情は受け付けません以上」

肉じゃがを皆の前に置き、びしりと指を立てて言った。

皆はぱちぱちと数回瞬きをした後に、恐る恐る肉じゃがへと箸を伸ばした。

そして其々食材を掴み、これまた恐る恐る口へと運んでいた。

私は皆が食べたのを確認し、近くに居た沖田さんから時計回りに感想を言ってもらう事にした。

沖田さんは私と目を合わせようとはしなかった。

「味が薄い」

それだけを言われ、私は苦笑しつつも次の人、斎藤さんに聞いた。

「・・・この味付けは好きだ」

ふんわりと微笑みながら言われれば、誰でも嬉しい気持ちにはなるだろう。

私はニコニコとしながら次の人、土方さんに聞いた。

「・・・」

土方さんは何も言おうとしない。だんまりを決め込んでいるようだ。仕返しを静かに心に決めた私は次の人、近藤さんに聞いた。

「美味しいぞ」

ニコニコと優しい笑みで言われ、私はもっとニコニコ顔になった。

そして次の人、原田さんに聞いた。

「この料理の名前、何て言うんだ？」

「肉じゃが」

感想では無かったため、私は軽く睨みながら即答した。

原田さんへの睨みを続行しながら次の人、藤堂さんに聞いた。

「此処に酒があれば・・・」

「未成年に酒を求めないでください」

またも感想とは程遠い事を言われ、イライラとしながら私は答えた。別に答えなくてもいいんだけどね・・・ほら、答えちゃうんだよ。

軽く呆れながら最後の人、永倉さんに聞いた。

「女も欲しいなあ」

「永倉さんの目は節穴ですかコノヤロー」

まさかの発言に私は永倉さんの頬を抓りながら言った。

「土方さんと三馬鹿の皆さんは・・・明日、覚悟しといてね？」

にこりと微笑みながら言うと、空気がぱきーんつと張り詰めた。私はその場から離れ、部屋に行った。

そしてニマニマした顔で早めの就寝を決行した。

洗濯物

「あ、おはよう」

私は斎藤さんに、にこりと笑いかけた。

「ああ、おはよう・・・」

斎藤さんは少しだけ口角をあげ、笑った・・・気がする。

現在、私は庭で洗濯物を干しており、現在時刻は朝の四時だ。

早めに寝すぎた昨日、どうしても早めに起きてしまった。

やることがない私が見つけたのは、大量に積まれた洗濯物。

暇だった私は洗濯物を暇つぶしに、とやり始めたのだ。

そして、洗濯物が半分になった辺りで斎藤さんがいつの間にか横に居たのだ。

「斎藤さん、早起きだね？」

私は皺を伸ばし、竿に洋服をかけながら斎藤さんに話しかけた。

「目が覚めてしまってたな」

斎藤さんは相変わらずの無表情で淡々と話す。

私はくすりと笑い、自分も同じようなものだと言った。

最後の一枚を干し終え、私は斎藤さんと共に部屋の中へと入った。

そして2人分のお茶を淹れると、一つを斎藤さんに渡してソファに座り、二人で雑談をしていた。

「斎藤さんは何でも知ってるんだね・・・なんだか尊敬しちゃうよ」

私はにこりと笑いかけた。そして、空になったコップをコトリ、と机の上に置いた。

「・・・一でいい」

斎藤さんが微かに、そう言った。

「・・・一・・・さん？」

斎藤さんが言っているのは名前の事だ、と私は直感的に思った。

そして、少しだけ自信がない中でそう言うと、斎藤さんは少しだけ

耳を赤く染めながら頷いた。

私はそんな斎藤さんを見て、少しだけ可愛いと思ってしまった。

「おはよー、弥和」

「ひゃうっ」

コップを洗っていると、不意に後ろから抱きつかれ、変な声が出てしまった。

犯人は原田さん。くすくすと後ろで笑っている。

全く・・・寝ぼける人なのかな？・・・

「おはよう、原田さん・・・とりあえず離れてもらっていい？」

私は苦笑しながら原田さんに話しかけた。

「嫌」

即答、それも一言で。

私はがつくりと項垂れ、はあと溜息をついてコップを水で洗った。

原田さんはするーしう。うん、それが一番いいよ。

私が黙々と作業をしていると、ずん、と体が重くなった。

「左之ー、なに弥和に抱きついてんだあっ！羨ましい限りだぞっ！」

永倉さんが原田さんの上にのしかかったみたいだけど・・・

「お、重い・・・」

大きな二人にのしかかれると、必然的に重くなる。

そんな重さに耐えられるはずがない私。今にも潰れそう・・・

「あー、わりい・・・寝ぼけてたわ」

原田さんは永倉さんを自分の上から払うと、私から離れてくれた。

私はホッとし、水で自分の手を洗うと朝ごはんの仕度を始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1753w/>

- 新撰組 in 平成 -

2011年10月9日14時54分発行